

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年八月一日発行(毎月一回一日発行)
第十七卷第四号(通巻第一九六号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第196号

8. 2010

極楽鳥花

品川 鈴子

義兄逝く

恥ぢらへる安^あ乗^{のり}の木偶も日焼け顔

かたつむり木の灯台が在りし磴

黒船を見し灯台の蝸牛

サングラス泪紛らす看取り妻



短夜を看取りの仮眠麗さるる

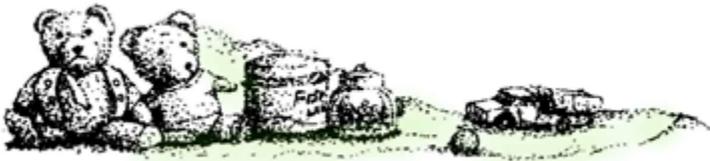
漬梅に白き黴浮く訃の夜半

花檯仏となりし唇緩む

納棺にスフの夏足袋寸余る

胸元に極楽鳥花棺閉ざす

訃の庭に梅雨茸茎も傘も白



玉

鈴

吟

兵庫 塩出 眞一

野草展まむしぐさにて列とまる
細道を象きざの小川へ山桜
こどもの日寺院に移動動物園
ポケットにユーロ硬貨花マロニエ
おすずてふ大きな苺選び買ふ

東京 静 寿美子

花の雨ジャズを原語で口ずさむ
悲しさのすくとんと落ちて草若葉
アルプスの雲引き連れてはたした神
張り合って氏子神輿の氣勢あげ
黒鷗なんじゃもんじゃの咲き乱る

大阪 島 純子

師の墓に目印となる残り花
恵那峡のしづきを浴びて紅つつじ
くろんど池荘園あとの若葉風
薫風に大漁旗の高師浜
茗荷竹日に日にほだけ庭の隅

香川 島内 美佳

花の山眼下に見える瀬戸の島
夕桜犬亡くなりしことを告げ
介護員きびきびとして若葉風
生徒らで賑やか春の中尊寺
古戦場たをやかにゆく春の川

大阪 島本 知子

水筒のお茶は格別遠足子
おにぎりはハートの形遠足子
母の日は教えてくれぬ保育園
母の日の母の一人の夕餉かな
五月晴れ泥湯の混浴露店風呂

愛媛 鈴木 てるみ

耕運機エンジン不発苗床寒
村中が同じ深さに春耕す
謎めいてピアノソナタの春の宵
踏切をすり抜けて行く新学期
腰ふつてパークッションの新入生

大阪 鈴木 浩子

鳥曇帝の袍衣を埋めし宮
独活小屋にしやがみし爺も耶蘇の商
筍のによつきり供華なき小町塚
京野菜作り手募り鳥の恋
筍に男の目利き無人店

香川 陶山 泰子

戸袋に姿見えねど雛の声
頂におむすびころり山笑う
修験者は真白きリュック春の山
霊山に春法螺貝の二重奏
飽きることなく永き日のすべり台

岡山 瀬口ゆみ子

緑青の扉閉ざして春の昼
城壁の隙間すかんぽ丈伸ばす
一茎を活け大方は花菜漬
げんげ田に遊ぶ赤白黄帽子
滑空に終わりなきかにつばくらめ

兵庫 高橋 大三

春の風邪癒えてコーラスゼミ仲間
契沖の訳業の寺花水木
囀りがクラリネットと競ふ丘
竹落葉よく来し園の茶房閉じ
菖蒲園名札は源氏物語

愛媛 武司 琴子

木の股に長蛇寝そべり庭師跳ぶ
濃紺の刺凛として春茄子
尾の白き夫婦の目高面白し
八十路とて機械操る草刈女
たんぽぽの絮もほどけて退院す

大阪 竹下 昭子

電線に休止符となる春からす
青時雨止めば俄に動く森
卯の花や校歌練習高らかに
夏浅し堂島ロールに長き列
ルノアール乙女の頬よ風薫る

大阪 武田ともこ

野遊びの一日過ごせり美作に
景よりも蔽に目移り島回り
弁当を展げし膝もと董草
春愁と膝の痔きにストレッチ
あいの風樹冠白々ひるがへる

愛媛 武智 恭子

春祭方言混じりの友多し
枝伸びて生花のように桐の花
数多の燕木々の間飛び交す
病室で階下見降し桜見る
低木林雉の親子がそろり出る

薬草歳時記

(一九五) ケイトウ(鶏頭)

須賀悦子

一本の鶏頭燃えて戦終る

加藤 楸邨

「嗚呼、あの時に鶏頭の花が咲いていたんだ・・・」

第二次大戦末期の昭和二十年七月三十日の大空襲の夜、福井の母の実家に疎開していた私達は、警報と同時に落とされ一発の爆弾に弾かれたように飛び出し、田圃道を逃げ迷っていた。焼夷弾に追われながら、火の海になった町の家々を通れ、漸く足羽川の堤防に辿り着いて、そこで一夜を明かした。翌朝、まだ燻ぶりの残っている家、焼け爛れた身体でトポトポ歩いている人達をぼんやり見ながら、母を探して家に戻る道中に見た青々とした稲と「赤い花」、あれが「鶏頭の花」だったんだと、文頭の句を読んだ時、ふと思いついて感無量であった。

鶏頭の学名「Celosia」はギリシャ語の「Kelaos」(燃やした)が語源で、花の燃えるような赤い様子を「celosia」は鶏冠状の意味があると云う。英名でも、ドイツ、フランスでも同様に「鶏のとさか」が呼び名になっているそうだ。

熱帯アジアが原産と謂われるが、日本には万葉の時代に渡来してきたようで、万葉集の中に「韓藍からあまとして詠まれている。

わが屋戸に韓藍時き生し枯れぬれど

懲りずてまたも時かんとぞ思ふ 山部赤人

秋さらば写しもせむとわが時きし

韓藍の花を誰か採みけむ 作者不明

今は園芸品種も多く、高さ三十〜九十センチの直立した茎の上部に鶏冠状、球状、筆状などの花序をつけ、色も赤、深紅、橙、黄、白などがある。

薬用としては、花、種子、葉、茎とも止瀉作用、止血作用があり、下痢止め、大腸炎、痔の出血、血尿にもよいとされる。開花の最盛期に花茎の先端、花穂の部分ハサミで切り取り日干し、種子は晩秋に花穂を取り、種を落として集め日干しにする。凍傷には乾燥した花10〜15gを砕いて水400gに煮出した汁で患部を洗う。

昔から鶏頭は民間薬として、打ち身の腫れや止血にも使われていたようである。日当たりのよいところで、花から落ちる種が次々育ち、夏から秋にかけ長く咲く丈夫な花である。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」(北隆館)

「漢方と民間薬百科」大塚敬節著(主婦の友社)

著者略歴 神戸薬科大学卒

鈴の奏

品川鈴子選

沖霞む浜に置きざり浮子数多 兵庫 高木 篤子

楼門の木組の妙技松の芯

かし若葉祠に石の祀られて

大寺に子供自転車花蘇鉄

神奈川

山本久美子

のどかなる鳥居の真中船通る

子の使いし五月人形老施設へ

初恋の人来ぬ初夏のクラス会

母の日と重なる父の誕生日

余花白し戒名無用の墓二つ

草笛の子にもおはこがあるらしく

寺総代すんなり決まり新茶汲む

鯉幟柳田國男生れし村

最短の国道なりしリラの花

飯蛸漁磯に積まれし二枚貝

初夏の浜歩調合わせて小鳥二羽

突堤にさつと広げし拾い海苔

兵庫

長瀬 節子

山桜立ち退き喫茶今日限り

物置の蛍光灯に燕の巢

百円を入れればお経柿若葉

抱く赤子瞳に映る鯉のぼり

乳母車おむすびを積む子供の日

新筆の硬さほぐれて夏写経

茶事の子等しびれを切らず子供の日

花筏玄界灘へ航きあぐむ

春の雲影も動かさず足立山

春衣裳揃へ和楽の大舞台

花冷に佇つ哨兵の逞しき

昭和の日大正翁国旗建て

舟形の竹の器に鉄線花

山の藤川面すれすれ咲き乱れ

さみどりの大手鞠日々純白に

送迎バスぽんと飛び出て蝶の昼

兵庫

本木下清美

窮屈な祠の地藏青嵐

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 年 森 恭子 //

*選句は全て 品川鈴子

かし若葉祠に石の祀られて

高木 篤子

寺総代すんなり決まり新茶汲む

荒木 稔

檜はブナ科コナラ属の常緑高木の一群の総称で暖地に多くて、古い葉を落した若葉は瑞々しい。明石は魚住の古跡を吟行した折、大木の根方に小さな祠が在るので、祭神は？と扉を開けて覗いて見ると、ぐり石が数個詰め込まれ、今にもはみ出て転がりそうな丸石ばかり。いかにも楚々たる神の宿る風情。日本には八百万の神々が至る所に在し、改めて民俗学的な興をそそられた。

初恋の人来ぬ初夏のクラス会

山本久美子

突堤にさつと広げし拾い海苔

野沢 光代

養殖なのか、天然か。ちぎれて流れ着いた海苔を拾っていつものように手際よくすぐそばの突堤に干した。日々の「もったいない」を暮らしに生かし、自然から命をいただいている上手な「始末」。今日日本人が再度取り組むべきことの一つ。

物置の蛍光灯に燕の巢

長瀬 節子

初恋の頃にはひたすら秘め事だった相手も、人生の半ばを越えると、クラス会ではもう大っぴらに自他共に認める存在。何年振りかで、懐かしさを分かち合えるのを、楽しみに出てきたのに、今回は顔が見えない。少々気抜けしたが、どこかほっとする熟年の心理。生涯の初夏は遠くへ過ぎ去って、夫々の実生活が何より大切なことから。

燕には人の住環境での繁殖傾向がある。糞害にかかわらず、アンケートでは都市・農村部ともに四分の三は、燕の

営巢を歓迎していると回答。物置だからいいかと許す作者も、夜に収納物をさがす時には蛍光灯をつけるのも可哀相と懐中電灯を使わざるをえなかつたりする。お宿提供的一幕。

茶事の子等しびれを切らす子供の日 坊野貴代美

少子化・核家族化などで家という結びつきも弱くなる中、作者宅では、連休だから都合もいいからと親戚や知人が大勢みえて茶事。子ども達は「終わるまではお行儀よくしないといけないよ」と言われている。我慢させた後、今日は子供の日だねと言つて持ち上げる。うまい計画。

花筏玄界灘へ航きあぐむ 山口 博通

玄界灘には、南西から北東に向かって対馬海流が流れている。灘に出て、その海流に乗れば、日露戦争時にバルチック艦隊に大勝した激戦地までたどり着ける花筏。大望を持ちながら大海の入日まで行きあぐねている。やがて早い流れに筏は分解され、ひとひらずつ沈んでいく。

山の藤川面すれすれ咲き乱れ 水上 貞子

藤棚に仕上げたものと違って、山の藤は自由に咲き誇る。

つる性なので巻きつく木を傷めるため、人工林では伐られ、多く山林に自生する。ちよつとした具合で飛沫のかかる川面すれすれに美しい房を垂らし、風に揺らんでいる。花が終われば少々多めの雨が川面を持ちあげても閑せずというところ。

送迎バスぼんと飛び出て蝶の昼 本木下清美

降園のバスが着いた。園から一緒に乗ってきたのだから、ドアが開いたら蝶がぼんと飛び出てきた。蝶を先頭に「ただいま」と言う園児がにぎやかに降りてくる。「帰ったらおやつにしようね。」というお母さんと手をつないで歩く園児のあとを蝶がしばらくの間ついていく。

母の日に細かくきざみ筍飯 植田 雅代

たまたま母の日、いつもどおり、ご高齢の母君に時季のものを食べてほしくて、しかし嚙下しやすいうち今日には細かく刻んでさし上げた。母の日といってもご自身も母のことも。気遣いのできる作者のしてもらう母の日サービスは、子どもたちのサプライズか、ご主人の企てるものか、自己申告か。